広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝の行旅詩 : 旅立ちの詩について
Author(s)	佐伯, 雅宣
Citation	中國中世文學研究 , 57 : 1 - 17
Issue Date	2010-03-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051418
Right	
Relation	

六朝の行旅詩 ―旅立ちの詩について―

佐伯雅宣

はじめに

中國では古來、旅を詠った詩、いわゆる「行旅詩」が數多く作られている。筆者は以前、六朝梁代の「行旅詩」[1]について、特に風景描寫を中心にその特徴を論じたが、それを踏まえた上で、更に考察を深め、六朝の行旅詩がどのような変遷を經て、いかに唐詩に繼承されていったのかという點を明らかにしていきたいと考えている。その方法としてまず六朝の行旅詩における旅の狀況をいくつかに分類した上で、それぞれに檢討を加えていくこととした。本稿ではその中でも「旅立ち」という狀況に絞って考察してみたい。

テキストは『文選』、および『古詩紀』を用い、逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』を適宜參照した。そしてその内容から、旅立つ者の立場で詠われたと思われる作品を取り上げる。例えば『文選』の「祖餞」の部に收められるような送別の宴で作られた詩、その中でも旅立つ側が作ったと判斷できる、いわゆる留別にあたるものなどは、旅立ちに際しての詩であると考え、考察の對象とした。しかし、松原朗氏が『中國離別詩の成立』で指摘するように、六朝期には、送別・留別の區別はそれほどはっきりしておらず[2]、内容からも判別できないものが多い。そういった詩は今回は含めないこととした。

一

まず六朝に先立ち、『詩經』・古詩について見てみたい。

行旅詩は古くはすでに『詩經』から見られるが、そこに詠われる旅とは、出征・行役に從ってのものであり、旅の苦難や憂い、親しい人との離別の悲しみ、あるいは旅先において故郷を思う心情などが中心に詠われている。では、その中で旅立ちはどのように描かれているのだろうか。

『詩經』魏風「陟岵」

陟彼岵兮　　彼の岵に陟り
瞻望父兮　　父を瞻望す

父曰嗟予子　　父曰く 嗟予が子
行役夙夜無已　　役に行きて 夙夜 已むこと無からん
上慎旃哉　　上ばくは 旃を慎しめ哉
猶來無止　　猶ほ來れ 止まる無かれ

例えばこれは出征のために旅に出た者が、山に登り故郷の方を顧みて詠った詩である。ここに言う父の台詞「嗟予が子 役に行きて 夙夜 已むこと無からん。上はくは旃を慎しめ哉 猶ほ來れ 止まる無かれ」とは、旅立ちに際して贈られた言葉を思い出してのものと見ることができよう。(3)

『詩經』小雅「采薇」

昔我往矣　　昔 我 往きしとき
楊柳依依　　楊柳 依依たり
今我來思　　今 我 來るに
雨雪霏霏　　雪雨ること霏霏たり
行道遲遲　　道を行くこと遲遲として
載渴載飢　　載ち渴き載ち飢う
我心傷悲　　我が心 傷悲するも
莫知我哀　　我が哀しみを知るもの莫し

またこの詩は、從軍した兵士が、遠い任地からようやく歸ってきたことを詠うものであるが、その中に、「昔我 往きしとき、楊柳 依依たり」と、やはり旅立ちの際の状況を思い出して詠っている。ただしあくまでその中心は、還ってくる途上の「雪雨ること霏霏」たる辛い状況を、旅立ちの際の「楊柳 依依」たる春の風景と比較する點にある。

このように『詩經』の中には、旅の途上において、旅立ちの時の樣子を思い起こして詠うものはいくつか見られるが、旅立つその時を詠った詩は見られない。

また、旅立ちに際しては、必ず親しい人（家族、友人ら）との別れがついてまわる。つまり旅立ちと離別とは切り離せないものであるが、『詩經』の中にそういった旅立ちにおける離別が詠われるものも、ほとんど見られない。『詩經』における離別とは、旅の途上において故郷の妻を思う詩、あるいは遠く旅する夫を思う妻の心情を詠う詩など、別れるまさにその時ではなく、すでに別れた後の心情として詠われていることが多い。(4)

この別れの時、離別の瞬間というものが盛んに詠われるようになるのは、おそらく漢代の古詩からであろう。古詩においても『詩經』と同じようにやはり旅の苦難などを詠うものが多いが、その中で李陵・蘇武の詩とされる一連の作品には多く離別の場面が詠われている。(5) これらは『先秦漢魏晋南北朝詩』では、李陵「錄別詩」として收められており、離別詩としてはかなり早い段階のものであると考えられるが、見送る側、旅立つ側、どちらの立場で詠ったものか、すなわち送別か留別か定かでないものが多い。はっきりと特定できるものの大半は實は

見送る側の立場で詠われたものであるが、数少ない旅立つ側の立場からのものと思われる詩（留別詩）をいくつか擧げておく。

「擬蘇李詩十首」蘇武答詩二首・其二

雙鳧俱北飛　雙鳧　俱に北に飛び
一鳧獨南翔　一鳧　獨り南に翔ける
子當留斯館　子　當に斯の館に留まるべく
我當歸故鄉　我　當に故鄉に歸るべし
一別如秦胡　一たび別るれば秦胡の如く
會見何詎央　會見　何詎ぞ央きん
愴恨切中懷　愴恨として中懷を切にし
不覺淚沾裳　覺えず　淚　裳を沾す
願子長努力　願はくは　子　長く努力せよ
言笑莫相忘　言笑　相ひ忘るる莫かれ

この詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』では、李陵「錄別詩」其十七として收められている。「子　當に斯の館に留まるべく、我　當に故鄉に歸るべし」という句を見ると、旅立つ側の立場から詠われたものであろう。[6]「我」が故鄉へと旅立つために、今まさに親しい人と別れることになる、その離別の時が描かれており、『詩經』にはあまり見られなかったものである。

蘇武「詩三首」其三

結髮爲夫妻　結髮して夫妻と爲り
恩愛兩不疑　恩愛　兩つながら疑はず
歡娛在今夕　歡娛　今夕に在り
燕婉及良時　燕婉　良時に及ばん
征夫懷往路　征夫　往路を懷ひ
起視夜何其　起ちて夜の何其を視る
參辰皆已沒　參辰　皆な已に沒し
去去從此辭　去り去りて此れ從り辭せん
行役在戰場　行役　戰場に在り
相見未有期　相ひ見ゆること未だ期有らず
握手一長歎　手を握りて一たび長歎すれば
淚爲生別滋　淚　生別の爲に滋し
努力愛春華　努力して春華を愛し
莫忘歡樂時　歡樂の時を忘るる莫かれ
生當復來歸　生きては當に復た來り歸るべし
死當長相思　死するも當に長く相ひ思ふべし

この詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』では、李陵「錄別詩」其五として收められている。この詩においても、「征夫往路を懷ひ、起ちて夜の何其を視る。參辰　皆な已に沒し、去り去りて此れ從り辭せん」といい、まさにこれから旅立とうとする樣子が詠われている。

これらの詩は、あくまで離別を詠うことに主眼があるのだが、そのきっかけとなる旅に出る時の樣子もまた描かれており、その點では、旅立ちの詩として最も早いも

のの例と見ることができるであろう。

二

では續いて六朝時代の詩を見てみたい。

まず三國・魏であるが、魏詩で旅を詠ったものとなると、魏武帝の「苦寒行」、あるいは陳琳の「飲馬長城窟行」など、その多くは樂府である。その内容はやはり旅・行軍の苦難を詠ったものであり、『詩經』や古詩に見られる行旅詩からはずれるものではない。そして旅立ちの場面を詠うものもあまり見られないが、例えば以下のような詩がある。

王粲「七哀詩」其一

西京亂無象　西京　亂れて象無く
豺虎方遘患　豺虎　方に患ひを遘す
復棄中國去　復た中國を棄てて去り
遠身適荆蠻　身を遠くして　荆蠻に適く
親戚對我悲　親戚　我に對ひて悲しみ
朋友相追攀　朋友　相ひ追攀す
出門無所見　門を出づるも　見る所無く
白骨蔽平原　白骨　平原を蔽ふ
路有飢婦人　路に飢ゑたる婦人有り
抱子棄草間　子を抱きて　草間に棄つ
顧聞號泣聲　顧みて號泣の聲を聞くも
揮涕獨不還　涕を揮ひて獨り還らず
未知身死處　未だ身の死する處を知らず
何能兩相完　何ぞ能く兩つながら相ひ完からんと
驅馬棄之去　馬を驅りて　之を棄てて去り
不忍聽此言　此の言を聽くに忍びず
南登霸陵岸　南のかた霸陵の岸に登り
回首望長安　首を回らして長安を望む
悟彼下泉人　悟る　彼の下泉の人の
喟然傷心肝　喟然として　心肝を傷ましむるを

この詩は王粲が戰亂のため、都長安を離れ、遠く荆州に赴くことを詠ったものであるが、子を捨てざるを得ない婦人の樣子などを中心に、時の戰亂を嘆くものとなっている。なお、其の二では、「荆蠻非我鄉、何爲久滯淫。……羈旅無終極、憂思壯難任」（荆蠻は我が鄉に非ず、何爲れぞ久しく滯淫せん。……羈旅　終極無く、憂思　壯んにして任へ難し）と、故鄉を遠く離れた荆州の地における旅の憂いが詠われており、この王粲の「七哀詩」には行旅詩としての側面もある。そしてここに擧げた其の一においては、都を離れる場面が詠われていることから旅立ちの詩と見ることもできるであろう。とりわけ「南のかた霸陵の岸に登り、首を回らして長安を望む」というように、出發した後、ふと都（故鄉）の方を振り返るというのは、旅立ちの詩の一つの典型とも言える。[7]

そして『文選』の行旅の部は、西晉の潘岳・陸機らの

詩から始まるが、その中から一例を擧げる。

陸士衡「赴洛二首」其一　洛に赴く二首　其の一

希世無高符　世を希ふも高符無く
營道無烈心　道を營むも烈心無し
靖端肅有命　靖端にして有命を肅み
假楫越江潭　楫を假りて江潭を越ゆ
親友贈予邁　親友　予が邁くに贈り
揮淚廣川陰　淚を廣川の陰に揮ふ
撫膺解攜手　膺を撫して攜手を解き
永歎結遺音　永く歎きて遺音を結ぶ
無跡有所匿　跡無くして匿す所有り
寂漠聲必沈　寂漠として　聲　必ず沈む
肆目眇不及　目を肆くすも眇として及ばず
緬然若雙潛　緬然として雙つながら潛るるが若し
南望泣玄渚　南に望みて玄渚に泣き
北邁涉長林　北に邁きて長林を涉る
谷風拂脩薄　谷風　脩薄を拂ひ
油雲翳高岑　油雲　高岑を翳ふ
亹亹孤獸騁　亹亹として孤獸騁せ
嚶嚶思鳥吟　嚶嚶として思鳥吟ず
感物戀堂室　物に感じて堂室を戀ふ
離思一何深　離思　一に何ぞ深き
佇立愾我歎　佇立して愾として我歎き
寤寐涕盈衿　寤寐に　涕　衿に盈つ
惜無懷歸志　惜しむらくは　歸るを懷ふの志無し
辛苦誰爲心　辛苦して誰か心を爲さん

これは陸機が故郷を離れ、洛陽へ赴く際の詩である。最初に旅立ちにおける別れの場面が描かれ、その後、旅の途上の風景描寫が續いていく。そしてこれらの風物に心動かされ、離別の情が一層深くなっていくことを述べている。旅の中の一場面として旅立ち・離別の樣子が描かれているが、旅立ちそのものを主題とした詩ではない。

ところで、この晉代の頃から行旅詩において新たな傾向が見られるようになる。それまで詩人たちが詠う旅とは、後漢末以降の動亂の時代という背景もあり、從軍によるもの、戰亂を避けるためのものなど、戰と大きく關わるものが多かった。しかしこの頃から仕官と關わる旅が多くなる。『文選』行旅の部の最初にあげられる潘岳の「在河陽縣作」、「在懷縣作」はともに、縣令となって赴任した先において作られたものである。その他にも『文選』には、詩人が官吏として、あるいは王の幕僚として都（故郷）を離れ、地方にあった際に作られたと思われる詩がいくつかある。すなわち六朝時代においては、このように地方に赴任し、その地に數年留まり續ける狀況もまた、旅の途上にあると認識していたのであろう。

そしてこの陸機の詩は、仕官のために故郷を離れ、洛陽へと赴くことを詠ったものである。この他に『文選』「行旅」の部に收められる詩の多くは、地方官として任

地に赴くもの、任期を終えて都へ還るもの、あるいは休暇を得て故郷へ歸るものなど、仕官と關わる旅を詠ったものである。こういった行旅詩が、この晉代頃から盛んに作られるようになるのだが、旅立ちにのみ焦點を当てて詠われるものはまだ見られない。

三

さて時代が下って宋代に至り、この行旅詩に以下のような作品が登場する。

謝靈運「永初三年七月十六日之郡初發都」
謝靈運「初發石首城」
謝靈運「夜發石關亭」
謝靈運「發歸瀨三瀑布望兩溪」
鮑照「從臨海王上荆初發新渚」
鮑照「發後渚」
鮑照「發長松遇雪」

このように謝靈運・鮑照あたりから、明らかに「發～」という詩題が用いられるようになり、この點を見ても、この宋代の頃から旅立ちを主題とした詩が作られるようになったと言えるのではないか。

では、具體的に彼らの詩を見ていきたい。

謝靈運「永初三年七月十六日之郡初發都」

永初三年七月十六日　郡に之かんとして初めて都を發す

述職期闌暑　述職は闌暑に期するも
理棹變金素　棹を理むるは金素に變ず
秋岸澄夕陰　秋岸　夕陰澄み
火旻團朝露　火旻　朝露團かなり
辛苦誰爲情　辛苦して誰か情を爲さん
遊子値頽暮　遊子　頽暮に値ふ
愛似莊念昔　似たるを愛するは莊の昔を念ふがごとく
久敬曾存故　久しく敬ふは曾の故を存するがごとし
如何懷土心　如何せん　土を懷ふの心
持此謝遠度　此を持して遠く度るを謝す
李牧愧長袖　李牧は長袖に愧ぢ
郤克慚躡步　郤克は躡歩に慚づ
良時不見遺　良時にして遺てられず
醜狀不成惡　醜狀　惡まるるを成さず
曰余亦支離　曰に余も亦た支離し
依方早有慕　方に依りて早に慕ふ有り
生幸休明世　生　休明の世に幸せられ
親蒙英達顧　親しく英達の顧を蒙る
空班趙氏璧　空しく趙氏の璧に班なり
徒乖魏王瓠　徒らに魏王の瓠に乖く
從來漸二紀　從來　漸く二紀にして
始得傍歸路　始めて歸路に傍ふを得たり
將窮山海迹　將に山海の迹を窮め

永絶賞心悟　　永く賞心の悟を絶たんとす

これは謝靈運が永嘉太守として左遷されることとなり、その出發に際しての作である。まず旅立ちの季節（秋）の風景の描寫から始まり、續いて都を離れて遠く旅することへの愁い、親しい人々との離別の悲しみを典故を用いつつ詠っている。そして「如何せん 土を懷ふの心、此を持して遠く度るを謝す」と、この地を立ち去りがたいのだが、旅に出ねばならぬ自分自身の身を嘆いている。

この中でとりわけ特徴的なのは最後の四句である。そこには「從來 漸く二紀にして、始めて歸路に傍ふを得たり。將に山海の迹を窮め、永く賞心の悟を絶たんとす」といい、これから向かう永嘉郡への旅の途上にある故郷始寧に對する思い、いずれはその地で隱棲したいという心情が詠われている。すなわち旅立ちにあたり、その旅の行く手に對する思いが述べられているのである。

謝靈運「鄰里相送方山詩」　　鄰里 相ひ方山に送る詩

祇役出皇邑　　役を祇みて皇邑を出で
相期憩甌越　　相ひ期して甌越に憩ふ
解纜及流潮　　纜を解きて流潮に及ばんとするも
懷舊不能發　　舊を懷ひて發する能はず
析析就衰林　　析析として衰林に就き
皎皎明秋月　　皎皎として秋月明らかなり
含情易爲盈　　情を含みては盈つるを爲し易く
遇物難可歇　　物に遇ひては歇む可きこと難し
積痾謝生慮　　積痾もて生慮を謝り
寡慾罕所闕　　寡慾にして闕くる所罕なり
資此永幽棲　　此に資りて永く幽棲せん
豈伊年歲別　　豈に伊れ年歲の別れならんや
各勉日新志　　各おの日新の志を勉め
音塵慰寂蔑　　音塵もて寂蔑を慰さめよ

この詩は先の詩と同じく、永嘉郡に向かうに際して、都近くの方山で見送ってくれた友人に贈った詩であり、『文選』では「祖餞」の部に收められている。「發～」という詩題ではないが、今回は旅立ちの詩として考えた。

まず「纜を解きて流潮に及ばんとするも、舊を懷ひて發する能はず」と、やはり親しい友や故郷を思って立ち去りがたい心情を述べ、續いて秋の情景を描寫し、「情を含みては盈つるを爲し易く、物に遇ひては歇む可きこと難し」と、それらの風物が一層離別の情をかき立てると言う。そして「此に資りて永く幽棲せん」と、ここでもこの旅を契機として隱棲を求める氣持ちが詠われている。

また、謝靈運が臨川内史に左遷される際、都を旅立つときに作ったとされる「初發石首城」（初めて石首城を發す）では、

遊當羅浮行　　遊びては當に羅浮に行くべく
息必廬霍期　　息ふは必ず廬霍に期せん

越海陵三山　　海を越えて三山を陵ぎ
遊湘歴九嶷　　湘に遊びて九嶷を歴ん

と、羅浮山や廬山、霍山、東海の蓬萊山などの三山、九疑山などへ行きたいと詠っている。これもやはり隠棲にふさわしいような地を求めてのことであろう。

これら謝靈運の旅立ちの詩においては、別れが辛く、その地を立ち去りがたいという憂い悲しみと同時に、これから向かう旅の行く手への思い、そこは隠棲にふさわしい地である、あるいはそうであってほしいという心情などが詠われている。

これまで行旅詩の中の一部として詠われていた旅立ち、あるいは離別を詠う詩においては、あくまで親しい人と別れることへの寂しさ、辛さが中心であり、旅の行く手への思いなどが述べられることはなかった。これから旅立つにあたり、その旅の行く手に思いを馳せるのはある意味當然であろう。しかし當時の旅とはやはり辛く苦しいものであるという意識から、旅立つにあたってその行く手に對してもそれほど希望は持てず、結果として旅先への思いが詠われることはなかったのではないか。しかし謝靈運は、旅の行く手に「隠棲」を求めようとすることで、旅立ちにおいて後ろ向きだった意識を變え、それを詩に詠っていたのではないだろうか。そのように考えると「發～」という詩題を用いたこととも合わせて、この謝靈運が新たに旅立ちの詩を作り出したと言えるであろう。

一方、鮑照の詩にも、やはり「發～」という詩題の作が見られる。年代的な差異、當時の文壇における影響力という點を考慮しても、やはり謝靈運の詩が意識されていたと思われる。

鮑照「從臨海王上荆初發新渚」(9)

臨海王に從ひて荆に上らんとし初めて新渚を發す

客行有苦樂　　客行に苦樂有り
但問客何行　　但だ問ふ　客　何くにか行くと
扳龍不待翼　　龍に扳りて翼を待たず
附驥絶塵冥　　驥に附して塵冥を絶つ
梁珪分楚牧　　梁珪　楚牧に分たれ
羽鷁指全荆　　羽鷁　全荆を指す
雲艫掩江汜　　雲艫　江汜を掩ひ
千里被連旌　　千里　連旌を被る
戾戾旦風遒　　戾戾として　旦風　遒かに
嘈嘈晨鼓鳴　　嘈嘈として　晨鼓鳴る
收纜辭帝郊　　纜を收めて　帝郊を辭し
揚棹發皇京　　棹を揚げて　皇京を發す
狐兔懷窟志　　狐兔　窟を懷ふの志
犬馬戀主情　　犬馬　主を戀ふるの情
撫襟同太息　　襟を撫して　同に太息し
相顧俱涕零　　相ひ顧みて　俱に涕零つ
奉役塗未啓　　役を奉じて　塗　未だ啓かざるに

思歸思已盈　　歸るを思ひて　思ひ　已に盈つ

この詩は、主君たる臨海王に従って荆州に向かうため都建康を出立したときの作である。そのためか「雲艫 江汜を掩ひ、千里 連旌を被る。戾戾として旦風遒かに、嘈嘈として晨鼓鳴る。纜を收めて帝郊を辭し、棹を揚げて皇京を發す」と盛んなる船團の樣子が描寫されている。もともと行旅詩においても、主君の巡行の盛んなさまを詠うことはすでに『詩經』などにも見られ、[10] また王粲の「從軍詩」にもその傾向がある。冒頭の句「客行に苦樂有り、但だ問ふ 客 何にか行くと」とは、明らかに「從軍詩」其一に「從軍有苦樂、但問所從誰」（從軍に苦樂有り、但だ問ふ 從ふ所は誰ぞと）とあるのを踏まえている。主君に從っての旅ということもあり、個人が旅立つ場合とは事情も異なるであろうが、主君に從いたいという思いと同時に、一方で故郷に留まりたいという相反する思いを抱き、それを詩に詠っているのは特徵的である。それは「狐兔 窟を懷ふの志、犬馬 主を戀ふるの情」という二句によく表されているが、最後には「役を奉じて 塗未だ啓かざるに、歸るを思ひて 思ひ已に盈つ」といい、故郷へ後ろ髮引かれる思いで結ばれている。

鮑照「發後渚[11]」　後渚を發す

江上氣早寒　　江上　氣　早に寒く
仲秋始霜雪　　仲秋　始めて霜雪あり
從軍乏衣糧　　軍に從ふに衣糧乏しく
方冬與家別　　方に冬にして家と別る
蕭條背鄉心　　蕭條たり鄉に背くの心
悽愴淸渚發　　悽愴として淸渚に發す
涼埃晦平皐　　涼埃　平皐を晦くし
飛潮隱脩樾　　飛潮　脩樾を隱す
孤光獨徘徊　　孤光　獨り徘徊し
空煙視昇滅　　空煙　視(みすみ)す昇り滅す
塗隨前峰遠　　塗は前峰に隨ひて遠く
意逐後雲結　　意は後雲を逐ひて結ぼる
華志分馳年　　華志　馳年を分ち
韶顏慘驚節　　韶顏　驚節を慘(いた)む
推琴三起歎　　琴を推して三たび歎を起し
聲爲君斷絕　　聲　君が爲に斷絕す

この詩もやはり都近くの後渚を旅立つに際しての作である。まず最初に旅立ちの季節、冬の風景を描き、「蕭條たり 鄉に背くの心、悽愴として淸渚に發す」と、故郷に思いを殘しつつの旅立ちであることを詠う。そしてそこから續く「涼埃 平皐を晦くし、飛潮 脩樾を隱す。孤光獨り徘徊し、空煙 視す昇り滅す」といった蒼茫たる風景は、これからの旅の前途を表すものと言えるのではないか。これは實際に眼にしたものと言うよりも心象風景と言うべきかも知れないが、「塗は前峰に隨ひて遠く」とあるように、その視線は明らかに前方へと向けられている。

心情的には「意は後雲を逐ひて結ぼる」というように後ろ向きであり消極的ではあるが、旅立ちに際してこれからの前途の風景を詠っているという点は、それまでの詩にはあまり見られないものである。

しかし鮑照の詩には、旅の前途に隱棲を求める氣持ちが詠われることはない。この点は謝靈運とは大きく異なっているが、しかし「發～」という詩題を用い、旅立ちを主題として詩に詠うということは、やはり謝靈運の影響を受けてのものであろう。

四

では續いて齊にいたり、謝朓の詩を見てみたい。

謝朓「之宣城出新林浦向版橋」[12]

宣城に之かんとして新林浦を出で版橋に向ふ

江路西南永　　江路　西南に永く
歸流東北鶩　　歸流　東北に鶩す
天際識歸舟　　天際に歸舟を識り
雲中辨江樹　　雲中に江樹を辨つ
旅思倦搖搖　　旅思　倦みて搖搖たり
孤遊昔已屢　　孤遊　昔より已に屢しばなり
既懽懷祿情　　既に祿を懷ふの情を歡ばしめ
復協滄州趣　　復た滄洲の趣に協ふ
囂塵自茲隔　　囂塵　茲れ自り隔て
賞心於此遇　　賞心　此に於て遇ふ
雖無玄豹姿　　玄豹の姿無しと雖も
終隱南山霧　　終に南山の霧に隱れん

この謝朓の詩は、宣城太守として赴任するため都建康の西南にある新林浦を出發し、さらにその西にある版橋に向かった時の作である。まず今旅立とうとするまさにその時の風景を、「江路 西南に永く、歸流 東北に鶩す。天際に歸舟を識り、雲中に江樹を辨つ」と描寫している。この空間的な廣がりを持った奥行きのある風景は、これからの旅路を象徴するものと言える。

續いて「旅思 倦みて搖搖たり、孤遊 昔より已に屢しばなり」と、旅はこれまで何度も繰り返してきた憂うべきものだと詠うが、七句目以降、今回の旅に對する思いが述べられる。すなわちこの旅が「祿を懷ふの情」、仕官の志を満たすものであり、同時に「滄洲の趣」、隱棲の地を求める心情にかなうものであると言う。仕官と隱棲という相反する二つの思いに沿う旅であるというのもかなり特徴的であるが、彼が最終的に望んでいるのはやはり後者であろう。最後の四句で、これから向かう地は世俗から隔たっており、そこで「賞心」の人に遇えるだろうという期待、そしていずれは「南山の霧に隱れ」、隱棲したいという願望が詠われている。

また、同じく宣城郡に向かうにあたっての作、「始之宣城郡」（始めて宣城郡に之く）においても最後に、

江海雖未從　　江海　未だ從はずと雖も
山林於此始　　山林　此に於て始めん

といい、これから向かう地において隱棲を求める心情を詠っている。これらはやはり謝靈運の詩の影響を受けてのものであり、旅立つにあたり、これから向かう地を隱棲にふさわしい場所と捉えているのであろう。

しかし謝朓には次のような詩もある。

謝朓「京路夜發」

擾擾整夜裝
肅肅戒徂兩
曉星正寥落
晨光復泱漭
猶霑餘露團
稍見朝霞上
故鄕邈已夐
山川脩且廣
文奏方盈前
懷人去心賞
敕躬每跼蹐
瞻恩惟震蕩
行矣倦路長
無由稅歸鞅

京路　夜に發す

擾擾として夜裝を整へ
肅肅として徂兩を戒む
曉星　正に寥落たり
晨光　復た泱漭たり
猶ほ餘露の團かなるに霑ふも
稍く朝霞の上るを見る
故鄕　邈として已に夐かに
山川　脩く且つ廣し
文奏　方に前に盈ち
人を懷ひて心賞を去らん
躬を敕へて毎に跼蹐し
恩を瞻ては惟だ震蕩す
行かん　路の長きに倦むも
歸鞅を稅くに由無し

この詩も都を旅立つときのものである。「夜發」とあるが、實際には明け方近くのようであり、まず少しずつ夜が明けていく樣子を「曉星 正に寥落たり、晨光 復た泱漭たり。猶ほ餘露の團かなるに霑ふも、稍く朝霞の上るを見る」と、非常に纖細優美な描寫によって表している。

その後で謝朓は故鄕が遠くなることを詠うが、それに續けて、「文奏 方に前に盈ち、人を懷ひて心賞を去らん」と、山積みの仕事のため、「心賞」の人との交わりは捨てようと言う。そして「恩を瞻ては惟だ震蕩す」と、主君の恩に對する感謝を述べ、「行かん 路の長きに倦むも、歸鞅を稅くに由無し」といい、これから向かう旅路への決意が詠われている。すなわち故鄕（都）の友人たちへの思い、旅への憂いはあるが、それらを斷ち切って、職務に勵もうという意識を見て取ることができるであろう。

謝靈運は旅立つにあたり、その前途に「隱棲」という目的を見出すことで、沈みがちな氣持ちを前向きな方向へと變えようとし、謝朓も「之宣城出新林浦向版橋」などではその傾向を受け繼いでいた。しかしその一方で、彼は隱棲以外、すなわち任地において職務に勵むことそのものを、旅の目的として捉える場合もあったようである（先の「之宣城～」の詩においても、その旅が「祿を懷ふの情」を滿たすものでもあると詠っている）。いずれにせよこれらは辛い旅立ちという狀況にあって、その氣持ちを奮い立たせ、前へと向かわせるものであったと言

えるであろう。

五

さて梁代以降には、さまざまな形で旅立ちの詩が作られるようになる。[13] 筆者はかつて梁代の行旅詩における風景描寫についての考察を行い、その特徴の一つに、舟に乘って進む作者が見たであろう動きのある風景があることを指摘したが、[14] それは旅立ちの詩にもしばしば見受けられる。

劉孝綽「發建興渚示[15]到陸二黄門」

扁舟去平樂　還顧極川梁
猶聞棗下吹　尚識杏閒堂
洛橋分曲渚　官寺隱回塘
客行裁跬步　卽事已多傷
況復千餘里　悲心未遽央

扁舟　平樂を去り
還顧れば川梁を極む
猶ほ棗下の吹を聞き
尚ほ杏閒の堂を識る
洛橋　曲渚に分れ
官寺　回塘に隱る
客行　裁かに跬步なるも
事に卽して已に傷多し
況んや復た千餘里なるをや
悲心　未だ遽かには央まず

建興渚を發して到陸二黄門に示す

この詩は劉孝綽が都を旅立つ際、到洽、陸倕といった友人たちに贈った詩である。ここではその風景描寫に注目したい。一艘の舟が都を去っていき、そこから振り返ると、なお「棗下の吹」（都の音樂）が聞こえ、「杏閒堂」（送別の宴が行われた場所か）が見える。しかしその都の姿も、「曲渚に分れ」、「回塘に隱」れて見えなくなる。まだわずかしか進んでいないにもかかわらず、愁いは深く、まして千里彼方へと旅行く身においては、悲しみの情が盡きることはないと詠う。

その中心は親しい人との離別の悲しみを述べることにあるが、まさに旅立たんとするその時の風景、すなわち舟に乘って少しずつ離れていく都の樣子が巧みに描寫されており、その風景が一層離別の情をかき立てている。

劉孝威「出新林」

芒山眡洛邑　函谷望秦京
遙分承露掌　遠見長安城
故鄕已可識　遊子必勞情
霧罷前林見　風息涌川平
坐觀暮潮落　漸見夕煙生
無由一羽化

芒山より洛邑を眡
函谷より秦京を望む
遙かに分つ　承露掌
遠く見る　長安城
故鄕　已に識る可し
遊子　必ず情を勞せしむ
霧罷みて　前林見れ
風息みて　涌川平らかなり
坐ろに暮潮の落つるを觀
漸く夕煙の生ずるを見るのみ
一たび羽化するに由無し

新林を發す

徒想御風輕　　徒に風の輕きを御せんことを想ふ

この劉孝威の詩も、建康近くにある新林（浦）から旅立つ時の作であるが、「芒山より洛邑を眡、函谷より秦京を望む。遙かに分つ 承露掌、遠くに見る 長安城」と、旅立ちに際して遠くから都を眺める様子が詠われている。都（故郷）を見、それによって旅人（遊子）の情がかき亂されるのであるが、やがてその視線は「前林」とあるように、前へと移っていく。「霧罷みて前林見れ、風息みて涌川平らかなり。坐ろに暮潮の落つるを觀、漸く夕煙の生ずるを見る」と、前方に現れた清爽たる風景を詠っているが、それは故郷を離れることへの憂いを斷ち切るものだったのではないだろうか。

このように旅立ちに際して、後方（故郷）から前方（行く手）へと移っていく視線の變化もまた、それまでの行旅詩には見られない新たな表現であり、旅立ちという状況ならではであろう。

梁元帝「早發龍巢」[16]　　早に龍巢を發す

征人喜放溜　　征人　放溜を喜び
曉發晨陽隈　　曉に晨陽の隈を發す
初言前浦合　　初め前浦の合するを言ひ
定覺近洲開　　定めて近洲の開くを覺ゆ
不疑行舫動　　行舫の動くを疑はず
唯看遠樹來　　唯だ遠樹の來るを看る
還瞻起漲岸　　還りて起漲の岸を瞻れば
稍隱陽雲臺　　稍く隱る　陽雲臺

この梁の元帝の詩はいささかその背景が不明であるが、まず最初に「征人 放溜を喜び」と、旅立ちの喜びを詠っているのは特徴的である。「前浦」とあるように、その視線はまず前へと向けられており、旅を憂える様子は見られない。そして「初め前浦の合するを言ひ、定めて近洲の開くを覺ゆ。行舫の動くを疑はず、唯だ遠樹の來るを看る」と、舟に乘った作者の眼に映る動きのある風景が描かれている。最後に後ろを振り返り、徐々に隱れていく「陽雲臺」を眺めつつ旅立っていくのである。このように梁代の行旅詩において、しばしば動きのある風景が描かれることはすでに述べたが、それは旅立ちという状況とも關連しているのではないかと思われる。

すなわち動きのある風景を最初に見出すのは、それまで止まっていたところから動き出すその瞬間であり、舟に乘って旅立つまさにその時である。これから旅立たんとするその時、少しずつ離れていく故郷や都の樣子、周りを流れる風景などに着目し、それらを詩に詠うようになったのではないだろうか。

また、この元帝の詩では旅立ちという状況にも關わらず、旅の憂いというものが見られないが、このような詩は梁代以降から少しずつ見られるようになる。

何遜「曉發」

早霞麗初日
清風消薄霧
水底見行雲
天邊看遠樹
且望沿溯劇
暫有江山趣
疾兔聊復起
爽地豈能賦

曉に發す

早霞　初日に麗しく
清風　薄霧を消す
水底に行雲を見
天邊に遠樹を看る
且く沿溯の劇きを望み
暫く江山の趣有り
疾兔　聊か復た起ち
爽地　豈に能く賦せんや

この何遜の詩は明け方に出發したというだけで、その具體的な背景は不明であるが、旅立ちに際して眼にした清爽たる朝の風景が描かれている。

このように旅立ちに際して憂いや悲しみが描かれない、場合によっては逆に喜びといってもいいような心情さえも詠われることは、梁代以降、徐々に散見されるようになる。無論、全體としては憂いを抱いて旅立つ場合が多いのだが、その中にあって憂いのない旅立ちがいくつか見られるのも、この梁代以降の行旅詩の特徴の一つと言える。

おわりに

以上、六朝の行旅詩のうち、旅立ちを詠った詩について考察してきた。旅を詠った詩は古くは『詩經』から見られるが、そこに詠われる旅立ちとは、いずれも旅の途上において昔を思い起こすという形であった。漢代の古詩あたりから、離別を詠う詩が見られるようになり、そこに旅立ちの場面も描かれるようになる。やがて六朝時代に入ると、仕官と旅とが密接に關わるようになった。詩人たちは、官吏として地方に赴任するため、あるいは任期が終わって都へ戻るため、または休暇を得て故郷へ歸るためなど、仕官との關わりの中でさまざまな旅をする。よって行旅詩も多く作られるようになるが、大半は旅の途上での作（任地におけるものも含む）であった。やがて宋の謝靈運にいたり、初めて「發～」という詩題を用い、旅立ちそのものを主題とした詩を作るようになるのである。

謝靈運はその旅立ちの詩の中で、故郷を去りがたいという思いや親しい人々との離別の悲しみなどと同時に、旅の果てに隱棲を求めたいという心情をも詠っている。本來の目的地は當然のこと赴任先であるはずだが、謝靈運が旅立ちという場にあってこれから向かう先として強く意識していたのは、むしろその途上にある故郷始寧であり、その地での隱棲こそ彼が最終的に望むものであった。とかく憂いに沈みがちな辛い旅立ちという狀況において、旅の行く手に隱棲にふさわしい地があるという期待を持つことで、氣持ちを前へと向かわせようとしたのではないだろうか。

そしてこの謝靈運の影響を受けてであろう、齊の謝朓

もやはり旅の行く手に隱棲を求める心情を詠っている。しかしその一方で職務に對する前向きな意識を示すこともある。隱棲を求める心情と、職務に邁進しようという意識とは相反するものであるかもしれないが、そこに共通するのは旅立ちという憂いを帶びる場にあって、旅の前途に何らかの希望を見出そうとした點であろう。

また、梁の劉孝綽や劉孝威、梁の元帝らは旅立ちに際して、舟に乘っている自分たちの眼に映った動きのある風景を巧みに描き出している。それは謝靈運から始まる旅立ちの詩において、それまでにない新たな表現を模索していたためではないだろうか。また旅立ちの際の風景描寫によって、離別の悲しみ、旅の憂いがかき立てられることも當然多いが、この頃になると、必ずしもそういった憂い悲しみを帶びないものも少しずつ見られるようになる。それは旅立ちに限ったものではなく、旅そのものが必ずしも憂いと結びつくものではなくなっていくことを示すものと言えよう。

そして唐代に至っても、「發～」を詩題とするような旅立ちの詩はしばしば作られている。そして憂い哀しみを帶びない、逆に旅立ちの喜びを詠うような作品も徐々に增えてくる。[17] また旅の前途に何らかの希望・期待を抱くものもやはり見受けられる。しかしそれは謝靈運のように旅の行く手に隱棲にふさわしい地を求めるというより、隱棲から離れ、純粹にこれから向かう地の素晴らしさ、美しい風景そのものに期待するものとなっていくのではないかと思われる。[18] ただしこれらについてはまだ考察が不十分であるため、詳しくはまた稿を改めて論じたい。

なお今回はあくまで旅立ちという狀況に絞ったもののみを取り上げたため、今後は、その他の狀況における行旅詩についても檢討を加え、さらに唐代の行旅詩の特徵なども考察し、六朝の行旅詩の變遷と、唐詩への繼承について明らかにしていきたいと思う。

注

(1) 拙稿「梁代の行旅詩—風景描寫を中心に—」(『中國中世文學研究』第四十五・四十六合併號　二〇〇四)

(2) 松原朗『中國離別詩の成立』(研文出版　二〇〇三)「序論—主題と樣式」を參照。

(3) この「父曰」について、孔穎達疏では、「我本欲行之時、而父敎戒我曰…」(我 本と行かんと欲するの時、而して父我に敎戒して曰く…) と、旅立ちの際に送られた言葉であると解釋する。一方、朱熹の集傳では、「因想像其父念己之言曰…」(因りて其の父の己を念ふの言を想像して曰く…) といい、故鄕にある父の言葉を想像してのものであると解釋している。ここでは前者に從う。

(4) ただし以下のような例はある。

『詩經』邶風「燕燕」

之子于歸　遠送于野　　之の子 于に歸る　遠く野に送る
瞻望弗及　泣涕如雨　　瞻望するも及ばず　泣涕 雨の如し

これは歸りゆく人 (實家に歸る婦人) を送る、いわば送別

の詩であり、離別詩として最も古い例の一つと言える。

(5) 李陵・蘇武の詩については、制作時期からその眞僞についても諸説あるが、本稿では後漢末の無名氏の手によるものと捉えておく。松原氏前掲書「蘇武李陵詩考—離別詩の一つの源泉」參照。

(6) この詩の三・四句について、『太平御覽』卷九一九では「我當留斯館、子當歸故鄉」(我 當に斯の館に留まるべく、子當に故鄉に歸るべし) となっており、そうなると立場も變わってくる。ただし、同じく『太平御覽』の卷四八九、及び『藝文類聚』卷二十九、『初學記』卷十八、『古詩紀』卷十では全て今回引用したとおりである。

(7) 例えば、謝朓「晚登三山還望京邑」(晚に三山に登りて京邑を還望す) では旅立った後、建康の西南三十キロほどのところにある三山にて、の王粲「七哀詩」を踏まえつつ「灞涘望長安、河陽視京縣」(灞涘より長安を望み、河陽より京縣を視る) と、都の方を振り返っている。あるいは後に擧げる劉孝綽「發建興渚示到陸二黃門」や、劉孝威「出新林」などもまた、旅立ちに際して都を振り返る樣子が見受けられる。

(8) 『文選』李善注には、「欲之郡、塗必經始寧、故曰歸路」(郡に之かんと欲すれば、塗 必ず始寧を經、故に歸路と曰ふ) とある。

(9) 「新渚」について、錢仲聯『鮑參軍集注』(上海古籍出版社 一九八〇) には、「韻府注、新渚在金陵」(韻府注に、「新渚は金陵に在り」と) とある。都建康にある地名と見て良いであろう。

(10) 『詩經』小雅「出車」、同「六月」など。

(11) 「後渚」について、前掲『鮑參軍集注』には、『古詩箋』聞人倓注を引き、「後渚在建業城外江上。齊書張融傳、融出爲封溪令、從叔永出後渚送之。卽此」(後渚は建業城外の江の上に在り。齊書張融傳に、「融 出でて封溪の令と爲り、從叔永 後渚に出でて之を送る」と。卽ち此なり) という。

(12) 「新林(浦)」は、建康の西南約一〇キロほどのところの地である。吳均「贈別新林」(新林に贈別す)、劉顯「發新林浦贈同省」(新林浦を發して同省に贈る)、庾肩吾「新林送劉之遴」(新林にて劉之遴を送る) などの詩があることから、齊梁代にはしばしばここで送別が行われた樣子が窺える。

(13) 例えば、沈約「早發定山」(早に定山を發す)、丘遲「旦發魚浦潭」(旦に魚浦潭を發す) などは、ともに『文選』に收められるが、いずれも赴任の途上に立ち寄った地點(定山、魚浦潭) から新たに出立するという狀況における作である。よって嚴密な意味での旅立ちの詩とは言えないかも知れないが、「發〜」という詩題を用いている點、および出立という狀況で詠われたことに變わりはなく、またその內容も、今居る地を立ち去りがたいという心情が詠われており、故鄉を離れがたい思いを詠う旅立ちの詩と通ずるものがある。すなわち謝靈運から始まる「發〜」という旅立ちの詩、そこから派生して新たにこのような詩が作られるようになったとも言えよう。

(14) 前掲拙稿を參照。

(15) 「建興」は、建康に作られた苑の名で、『梁書』武帝紀中

に「(天監四年二月) 立建興苑於秣陵建興里」(建興苑を秣陵建興里に立つ) とある。また『梁書』蕭景傳に「將發、高祖幸建興苑餞別、爲之流涕」(將に發せんとするに、高祖 建興苑に幸して餞別し、之が爲に涕を流す) とあり、ここでもやはり送別の宴が行われていたようである。

(16) 「龍巢」がどこを指すかは、今ひとつ定かではない。『隋書』地理志下によると、「漢東郡土山縣」の下に「梁曰龍巢、置土州」(梁は龍巢と曰ひ、土州を置く) とある。この地は今の湖北省隨州市の北にあり、梁代では司州に屬す。しかしその地に梁元帝が行った樣子は見られない。また詩中にある「陽雲臺」は、無論、もとは宋玉「高唐賦」に基づくものであるが、梁元帝に「詠陽雲樓簷柳」(陽雲樓の簷柳を詠ず)、劉孝綽に「登陽雲樓」(陽雲樓に登る) という詩があり、當時、實際にあった樓臺を指すと思われる。これについても具體的な場所は不明であるが、劉孝綽「登陽雲樓」を讀む限り、荊州の地にあったものと推測される(佐伯雅宣・佐藤利行「劉孝綽詩訳注 (4)」〔『中國古典文學研究』第三號 二〇〇五〕)。よって、この「龍巢」もまた荊州にあった地と解釋しておく。

(17) 唐詩で旅立ちの喜びを詠うものといえば、まず李白の「早發白帝城」(早に白帝城を發す) が擧げられる。この詩はその制作時期・背景について、若い頃に蜀を離れるまさに旅立ちの際のものとする解釋と、安祿山の亂に際して罪を得て流罪となって後、恩赦を受けて解放された時のものとする二通りの解釋があり、この點は改めて十分に檢討する必要があるが、いずれにせよ出立という場において喜びを前面に押し出して詠ったものであることは間違いない。

(18) 例えば杜甫の「發秦州」(秦州を發す) は、乾元二年、彼が秦州から同谷へと向かう際の作であるが、そこにはこれから向かわんとする地について、

漢源十月交　漢源　十月の交
天氣如涼秋　天氣　涼秋の如し
草木未黃落　草木　未だ黃落せず
況聞山水幽　況んや山水の幽なるを聞くをや
栗亭名更嘉　栗亭　名　更に嘉く
下有良田疇　下に良田の疇有り
充腸多薯蕷　腸に充つるに　薯蕷多く
崖蜜亦易求　崖蜜　亦た求め易し
密竹復冬笋　密竹　復た冬笋
清池可方舟　清池　舟を方ぶ可し

と、どれだけ素晴らしい地であろうかという思い、期待を詠っている。しかしこの詩の後半では今まで居た秦州について、長く滯在すべき地ではないと批判している。旅立ちという狀況において、前途に期待を抱く一方、それと比較して今まで居た地を批判して詠うことは、六朝には見られない特徵であり、非常に興味深い。